

「マートル」

廣瀬清一 事務局



和名は「銀梅花 ギンバイカ」という。この名が広まったのは1970年以降と比較的新しい。

学名は *Myrtus communis*。

アロマセラピーの流行に伴い、英語読みの「マートル Myrtle」が使われることが多い。

地中海沿岸及びヨーロッパ南西部を原産とする常緑性の低木。

葉は艶があり、ローレルより少し小ぶりで同じように葉を揉むと香りがする。

初夏になると梅に似た白い花をたくさんつける。花びらから飛び出した長い雄蕊が目を惹く。

花は、フレッシュ・スパイシーで軽い甘さのある自然な香りがする。

秋には小さな果実ができ、乾燥したものは香辛料(コルシカペッパー)として使われる。

西欧では聖書や神話にはじまり現代の結婚式のブーケやリースにと、時代を超えてポピュラーな植物である。

日本には明治末頃に入ってきたようだがはっきりしない。翻訳書籍を通して名が知られるようになった。

このため「ミルトス」「ミルト」「ミルテ」などの呼び名の方が聞き覚えがあるかもしれない。

アダムが禁断の実を食べ、楽園を追放される時、神の慈悲によって穀物としてコムギ、果物としてナツメヤシ、香りの花としてミルトスを持っていくことが許されたという。

他にも、美と愛と豊穡の女神アプロディテが泡立つ海から姿を現わした時、季節と時間の三女神ホーライに迎えられてミルトスの花冠を贈られたという。

ミルトスの木には特別の生命力があり、繁栄、勝利、復活さらに愛、美の象徴として扱われ、逸話が多い。



マケドニア メダ女王のミルトスの金製リース

紀元前4世紀後半

テッサロニキ考古学博物館

西欧北部に位置するドイツの人にとっては、女神が宿ったミルテは陽光の輝くイタリアの象徴でもある。

ゲーテの長編小説「ヴィルヘルム・マイスター修行時代」の中に「ミニョンの歌」と呼ばれる悲哀が滲む愛の詩がある。可憐な少女ミニョンは、ただ一つ覚えているのは湖でさらわれたことと言い、おぼろげな故郷の記憶の中にミルテの姿を探す。

この抒情詩にシューベルト、シューマン、リストなど多くの作曲家が曲をつけている。

(ミニヨンの歌)

君知るや南の国

レモンの木は花咲き くらき林の中に

こがね色したる柑子は枝もたわわに実り

青き晴れたる空より しづやかに風吹き

ミルテの木はしづかに ラウレルの木は高く

雲にそびえて立てる国や 彼方へ

君とともに ゆかまし

森鷗外 訳

さらには、ミルテは薔薇や百合のように、花が特に美しいわけでもないが、ギリシア、ローマ時代を通して花嫁を飾る存在であった。

ロベルト・シューマンは結婚式の前日に、「愛する花嫁へ」と書いた新しい歌曲集を、ミルテの花で飾って妻となるクララに手渡した。

ゲーテ、バーンズ、リュッケルト、ハイネ、ムーア、パイロン、モーゼンの詩に曲がつけられている。クララに渡した時には題名がなかったが、「ミルテの花 作品 25」と呼ばれる。

このようにミルテで花嫁を飾る習慣はヨーロッパ各地に伝わって今日も続いている。

ヴィクトリア女王の結婚式では、ブーケにマートルの小枝が使われた。女王はブーケに入っていたマートルを挿し木にして植えて育てた。

こうしてそれ以来、エリザベス女王、キャサリン妃、メーガン妃、ベアトリス王女と、このマートルの小枝をブーケに使っているという。

ところで、3、4年前に、白い愛らしい花の付いた写真を見て、葉に斑の入ったマートルを購入した。

根元に近い一本の細い枝の葉は、斑が抜けて緑になっていた。

こうした現象は「先祖返り」といい、斑入りの性質を獲得する以前の野生の気質に戻っているらしい。

そのため、斑入りよりも強く成長が早い。先祖返りした枝は見たら出来るだけ早く切り取るのが鉄則だとある。

斑入りの部分は、毎年6月になると花をたくさん付ける。花から心地よい香りがする。

先祖返りした枝に花が咲くのを待っていたが、背丈が親の木を超えたので切り取った。

よく言われることだが、見た目の良い園芸種は、改良によって原種の強さ、良さを失っていく。

枝葉の部分の香りを比べると、先祖返りした方が香りが強く豊かであった。

天には星がなければならぬ

大地には花がなければならぬ

そして、人間には愛がなければならぬ

ゲーテ 作

ごくごく普通の、そんな自然な世界を早く戻りたいものだ。

参考文献

- 1) 橋本竹二郎 「使ってわかるハーブ α 媚薬百科」
国書刊行会 1999
- 2) L. ディーズ、吉富久夫(訳) 「花精伝説」
八坂書房 1988
- 3) 野崎茂太郎 「民族誌 花の匂う」
近代文芸社 2003